

	薬 剤 名	剤型	判 定	処理方法	処理時期	使 用 量	適用土壌	適用地帯	使用上の注意
11) さとうきび	アメトリン	水和	実	土 壌	植付後・ 株出し	⊕ 20~30 g/a	全 土 壌	暖 地	
	NTN-70	水和	実・継	土壌～茎葉	植付直後	⊕ 30g/a	全 土 壌	暖 地	
					雑草 2葉期	⊕ 20~30 g/a			

昭和49年度水稻・畑作関係 生育調節剤試験成績概要

財団法人 日本植物調節剤研究協会

昭和49年度水稻・畑作関係生育調節剤試験の成績検討会は、昭和49年12月10日東京（於東京農林年金会館）で例年のとおり開催された。

本年度は、水稻関係について16薬剤、畑作関係4薬剤が供試された。供試薬剤の判定結果を示すと、次表の如くである。

昭和49年度水稻・畑作関係生育調節剤審査判定及び使用基準

A. 水 稻

薬 剤 名	有効成分および含有率	試 験 目 的	判 定	実用化に対する処理法	継 続 の 内 容
1) ベンジル アデニン (液)	・ N-6-ベンジルアミノプリン 3%	・ 雑苗の活着促進, 老化防止	継		・ 有望であるが実用化の検討を更に進める。
2) ボーマンP粉 L液	・ P; SiO ₂ + 魚成分 + CaO 0.015+0.8+6.0% ・ L; SiO ₂ + 魚成分 + CaO 0.008%+2%+ 400ppm	・ 成長促進 ・ 品質改善	継 ?		・ 水稻に対する効果は明瞭でない。 ・ 対象作物をかえて作用性の検討をする。

薬 剤 名	有効成分および含有率	試 験 目 的	判 定	実用化に対する処理法	継 続 の 内 容
3) ネマモール粒	・ D C I P 3 0 %	・ 発根促進	継		・ 水稻に対する効果は弱い。 ①対象作物をかえる。 ②土性による効果の差。 ③地域性。 ①, ②, ③について効果の検討をする。
4) オキシペロン 液	・ インドール酪酸 0.4 %	・ 発根促進 ・ 健苗育成	継		・ 実用的効果は認められ 有望であるが、更に試 験を継続して検討する。 (試験年次不足)
5) ユニフェロン 液	・ α-トコフェロール ・ ユビキノン	・ 発芽, 発根促進 ・ 健苗育成	継 ?		・ 効果が判然としない。
6) KC-481 水溶	・ ニコチン酸アミド 8 0 %	・ 初期生育促進	継		・ 発根促進効果について 更に継続検討する。
7) N-2000 水和	・ N-9-ベンジルアミ ノプリン 1 0 %	・ 活着促進効果 ・ 苗の乾物重増大 ・ ベーバーポット 苗ばらまき後の苗屈起促進 ・ 根転び倒伏の防止	実 および 継	・ 普通苗代では田植の2 週間前頃の茎葉に20 ppm水溶液を100 ml/m ² 噴霧処理する。 展着剤は使用しない。 ・ 稚苗では田植1週間前 に20ppm水溶液を 120ml/m ² 茎葉 に噴霧する。展着剤は 使用しない。 ・ 苗の屈起促進のため には田植の7日前に20 ppm液を200ml /m ² 散布する。	・ 適用地域の拡大, およ び本田における耐肥性 について検討。 ・ 苗屈起および倒伏防止 の効果については、試 験初年目であるため、 地域性, 土質, 品種な どにつき試験, 検討す る必要がある。 (根転び, 倒伏軽減効果 試験については、出穂 35日前に50ppm を400ml/m ² 茎 葉散布を中心とした設 計で検討する。)
8) カルバー 粉	・ CaO ₂ 53%以上	・ 湛水直播にお ける発芽, 苗 立の安定化	実 および 継	・ 粉衣量, 浸漬剤100 gに対し30gを粉衣 して播種する。 ・ 適用条件; 湛水直播	・ 省力化を前提とした剤 の改良, 機械化につい て検討。
9) RH-531 水溶	・ 3-カルボキシ-1- (P-クロロフェニル) 4,6-ジメチル-2- ピリドン(Na) 91%	・ 中苗育苗の安 定化, 徒長防 止効果	実 および 継	・ 1.5葉期に50~100 ppm水溶液を苗代m ² 当り150mlの割合で 茎葉に噴霧する。	・ 中苗育苗での, 使用量, 使用時期, 播種量, に ついて継続して検討す る。

薬 剤 名	有効成分および含有率	試 験 目 的	判 定	実用化に対する処理法	継 続 の 内 容
9) つづき				展着剤を必ず使用する。 ・処理20日以後に移植する。 ・タチガレン処理を併用する。	
10) RH-103 水溶	・RH-531(上記) 4.3% ・2,4PA 8.7%	・倒伏防止	継		・処理時期を出穂前4,5日を中心として更に継続して検討する。 ・被害の検討。
11) UMP 水溶	・5'-ウリジル酸ナトリウム	・生育促進 (収量増加)	実 および 継	・最高分けつ期にa当り60gを茎葉に散布する。 ・展着剤を加用すること。	・寒地への適用地域拡大をはかる。
12) RNA 水溶	・酵母リボ核酸	・生育促進 (収量増加)	実 および 継	・UMPに同じ	・登熟向上に対し、処理時期について検討する。
13) CMP 水溶	・5'-シチジル酸ナトリウム	・倒伏抵抗性の増加 ・登熟促進	継 ?		・効果不明瞭
14) アビオンE乳	・パラフィン 3.6%	・植え傷み防止 ・活着促進	実 および 継	(植え傷み防止) ・100~200倍液を田植直前に苗の茎葉に十分付着する程度に噴霧する。	・処理方法、適用条件について検討。 ・活着促進については更に試験検討する。
15) 植物保護被膜 剤NK		・土壌面からの蒸発制御 ・異常気象に対する植物保護	継		・更に継続検討を要する。
16) SK-23粒	・1-(α -ジメチルベンジル)-3-(P-トリル)ウレア 7%	・草丈抑制 ・収量増加	継 ?		・生育調節剤としての作用については、特に認められない。

B. 畑 作

薬 剤 名	有効成分および含有率	試 験 目 的	判 定	実用化に対する処理法	継 続 の 内 容
1) 31603-S 水和	2-ベンズイミドイル-3-ヒドロキシ-1,4-ナフトキノン 9%	(馬鈴薯, 落花生対象) ・生育促進 ・収量増加	継		
2) レグロックス 液	ジクワットジプロマイド 30%	(大豆, 小豆, 菜豆対象) ・落葉促進 ・子実乾燥効果 ・収穫作業能率の向上 ・乾燥効果による秋雑草防除	継		処理時期, 機械化作業とのむすびつきについて検討。
3) モリコフ イクス 粉	- EDTA - モリブデン - コバルト	(大豆対象) ・収量増加	実 および 継	大豆種子1L当たり1.2gを種子に粉衣して播種する。	土壌条件による効果の差, 品種間による効果の差について検討。
4) エスレル 液	2-クロル-エチル-フォスフォニックアシッド 10%	(バインアップル対象) ・熟期促進 ・開花促進	実	(熟期促進効果) ・収穫期20~25日前, 300~500ppm液を1果当たり25~50cc果頂部, 冠芽に噴霧する。 (開花促進効果) ・500~1000ppmにウレア2kg/10aを混用したものを1果当たり25~50cc茎葉に散布する。 ・500ppmにウレア2kg/10aを混用したものを1果当たり, 20~25cc, 葉芯部に注入処理する。	

植 調 協 会 だ よ り

© 日植調研究所発足す

昭和49年12月14日, 茨城県稲敷郡牛久
町柏田860番地, 財団法人日本植物調節剤研
究協会研究所において, 除草剤二十五周年記念,
植調十周年記念, 研究所落成記念式典を行なった。